中学校における俳句教材とその学習について

寺尾　滋明

はじめに

禅に示された求心的姿勢、庭園にみられる美の傾向などと相通じると思われる俳句は、あくまで直覚的なものが中心である。それだけに論理の世界をみつめるようには俳句の世界をみつめることはできない。それだけに、鑑賞のしかたをまちがうと「俳句とはこんなもの」という固定概念を植えつける結果になりやすい。

教科書が新しくかわったので、どんな句がどのようにとりあげられているかを調べてみた。ふさわしい鑑賞を考えてみる一歩にするためである。

さらに、昭和三十九年に実践した記録の一部を整理してみた。この年の学習をすませて何日か後に一生徒が「秋深き進学の悩み消えかねて」という一句を提出した。その瞬間、未熟な実践を思い出して、はずかしく思った。

短詩型文学の学習について考えてみる一段階として、その恥ずかしい実践をまとめてみたのである。

教科書にあらわれている俳句教材について

四十一年度から教科書が新しくなったので次の十種のものを中心に調べてみた。

三省堂AとB、光村、学図、日本書院、日本書籍、大阪書籍、筑摩、東京書籍、教育出版のものなどである。作者ごとの採択情況は次の通りである。

作者	採択した教科書数	延べ句数
松尾芭蕉	四	一五
与謝蕪村	四	一五
小林一茶	二	四
正岡子規	八	一五
内藤鳴雪	三	三
村上鬼城	六	七
夏目漱石	一	一
河東碧梧桐	四	五
高浜虚子	一〇	一五
尾崎放哉	一	一
久保田万太郎	一	一

前田普羅	二	二	さみだれを集めて早し最上川
飯田蛇笏	六	五	荒海や佐渡に横たふ天の川
荻原井泉水	三	五	菜の花や月は東に日は西に
長谷川かな女	一	一	小鳥来る音うれしさよ板びさし
水原秋桜子	八	一九	斧入れて香に驚くや冬木立ち
山口青邨	一	一	不二ひとつうづみ残して若葉かな
高野素十	一	一	大空に羽子（羽根）の白妙とどまれり
橋本多佳子	一	一	流れ行く大根の葉の早さかな
川端茅舎	七	九	春風や闘志いだきて丘に立つ
中村汀女	四	六	秋空を二つに断てり椎（しい）大樹
西東三鬼	二	二	をりとりてはらりとおもきすすきかな
山口誓子	八	一八	啄木鳥や落ち葉をいそぐ牧の木々
中村草田男	八	一三	夏草に汽罐車の車輪きて止まる
日野草城	二	二	七月の青嶺（あおね）まぢかく熔鉱炉
星野立子	一	一	スケートのひも結ぶ間もはやりつつ
芝不器男	二	二	冬の水一枝の影もあざむかず
加藤楸邨	四	五	そらまめの花の黒き目数知れず
松本たかし	一	二	万緑の中や吾子の歯生えそむる
長谷川素逝	一	一	がうがうと欅芽（けやき）ぶけり風の中
本島高弓	一	一	
石田波郷	四	五	

次の句は二種以上の教科書が採択しているものである。（　）内の数字は採択数

山路来て何やらゆかしすみれ草	（三）芭蕉
くたびれて宿かるころや藤の花	（二）〃
夏草やつわものどもが夢の跡	（二）〃
	（二）芭蕉
	（二）〃
	（二）蕪村
	（二）〃
	（二）〃
	（二）〃
	（二）虚子
	（二）〃
	（二）〃
	（二）〃
	（三）蛇笏
	（二）秋桜子
	（四）誓子
	（二）〃
	（二）〃
	（三）草田男
	（二）〃
	（二）〃
	（二）波郷

教科書では、芭蕉、蕪村、一茶らの句は、古典教材の一部とともに三年教材に入っている。あとの作者の句は多く二年教材の中に入っている。

表現形式からみた俳句教材

作者	初句切れ	切れ字	体言	二句切れ	三句切れ	体言どめ
芭蕉	五	○	四	三	八	一
蕪村	五	二	四	六	六	二
子規	四	四	二	六	七	二
鬼城	四	○	二	二	六	四
碧梧桐	三	○	一	七	四	四
虚子	一	四	四	二	二	五
秋桜子	五	一	一	二	四	三
茅舎	一	三	○	一	一	三
汀女	一	○	一	一	一	三
誓子	○	四	三	一	三	三
草田男	二	三	一	一	一	三
楸邨	○	一	二	二	二	二
波郷	○	三	一	一	一	一

初句が体言で切れている句の多くは、三句めのとめ方が切れ字、または終止形になっている。

春の水山なき国を流れけり　（蕪　村）
杉木立土につく手のうらすずし　（子　規）
赤とんぼ筑波に雲もなかりけり　（子　規）
こがね虫なげうつやみの深さかな　（虚　子）
きり一葉日当たりながら落ちにけり　（虚　子）
初蛙キリコロ遠く近くかな　（茅　舎）
露の玉蟻たぢたぢとなりにけり　（茅　舎）
扇風器大き翼をやすめたり　（誓　子）

これらの句は、絵画的表現（絵に書きあらわしやすいもの）になっている。初句に対象が明示されているので、句の世界を理解するのは容易である。

初句や二句で切れている句の多くは、体言どめになっている。

夏草やつはものどもが夢の跡　（芭　蕉）
荒海や佐渡に横たふ天の川　（芭　蕉）
閑かさや岩にしみ入るせみの声　（芭　蕉）
斧入れて香に驚くや冬木立ち　（蕪　村）
美しや障子の穴の天の川　（一　茶）
島々に灯をともしけり春の海　（子　規）
夕立や砂に突き立つ青松葉　（子　規）
山の上の月に咲きけりそばの花　（鬼　城）
小春日や石をかみゐる赤とんぼ　（鬼　城）
草の中やひとかたまりのすすきの芽　（碧梧桐）
なでしこや海の夜明けの草の原　（碧梧桐）
雲海や鴉のまひいる嶺（みね）一つ　（秋桜子）
啄木鳥や落ち葉をいそぐ牧の木々　（秋桜子）

これらの句は、初句や二句の切れている部分と三句の体言とを対応させてみると、句の内容を理解しやすいようである。

夏草や↑↓夢の跡
荒海や↑↓天の川
閑かさや↑↓せみの声
美しや↑↓天の川

小春日や↑↓赤とんぼ
月に咲きけり↑↓そばの花

表現内容からみた俳句教材

表現内容からみる見方には、いろいろあると思われる。その一つは題材（素材）表現の立場からみる場合である。Ⓐ題材一つを中心にして、いわゆる「一物の上にて作す」場合とⒷ二つ以上の題材を「取り合わせ」「配合」することによって表現する場合がこれにあたる。教科書に取材されている句のほとんどはⒷの場合である。

Ⓐの場合に相当する句には

さみだれを集めて早し最上川　（芭　蕉）
ぼたん散ってうち重なりぬ二三片　（蕪　村）
春の山重なり合うてみな丸し　（子　規）

などがある。

次に表現内容を主体の対象（事象）把握の姿勢からみる場合について述べてみよう。

㈠　直覚的写実的構成

①　視覚による場合（即物的・客観的描写が多く、主体の感情は抑制される）

道のべのむくげは馬に食はれけり　（芭　蕉）
山路きて何やらゆかしすみれ草　（芭　蕉）
くすの根を静かにぬらすしぐれかな（蕪　村）
不二ひとつうづみ残して若葉かな　（蕪　村）
雪残る頂一つ国境　（子　規）
赤とんぼ筑波に雲もなかりけり　（子　規）
花散るや耳振って馬のおとなしき　（鬼　城）
草の中やひとかたまりのすすきの芽（碧梧桐）
きり一葉日当たりながら落ちにけり（虚　子）
雲海や鷹のまひる嶺ひとつ　（秋桜子）
飛びおりてはずみやまずよ寒すずめ（茅　舎）
スケート場ヨードチンキのびんがある（誓　子）
青竹のただますぐなる影一つ　（楸　邨）

②　その他の場合（これは客観的な対象が主観的な作家の内界にひびいて、新しい心象表現を生みだしたものである。）

閑かさや岩にしみ入るせみの声　（芭　蕉）
斧入れて香に聞くや冬木立ち　（蕪　村）
犬が来て水飲む音の夜寒かな　（子　規）
をりとりてはらりと重きすすきかな（蛇　笏）
がうがうと欅芽けぶり風の中　（波　郷）

㈡　抽象的構成

作者（主体）の内部世界の抽象的思念を対象化する。感覚的世界と観念世界のからみあいである。

荒海や佐渡に横たふ天の川　（芭　蕉）
これがまあつひの住みかか雪五尺　（一　茶）
山降りて人なつかしや夕がへる　（虚　子）
学問のさびしさに堪え炭をつぐ　（誓　子）

指導について

教科書が新しくなる前の三十九年度に実践した記録をもとにまとめてみたい。

指導のねらい

三十九年度使用教科書では、俳句教材が三年の二学期にでていた。そのねらいは、「鑑賞」中心で、鑑賞文が一部掲載されていて句に表わされている光景や感情を理解し味わうことになっていた。もちろん鑑賞文をもとに一語のもつ重みをしっかりとらえてみる学習も予定されていた。

指導の手順

I　比較による鑑賞学習（A）

・春なれや名もなき山の薄がすみ　（芭蕉）

・春過ぎて夏きたるらし白たへの衣干したり天の香具山　（持統天皇）

二つを比較して、俳句の定型（門音）のきびしさを知る。いきなり「春なれや」と出さなければならないわけを考えてみる。「春過ぎて」の歌は万葉集のところで学習ずみであるから、理解は容易である。

徐々に感動をもりあげるゆとりは俳句にはない。芳賀秀次郎氏も「短歌の『抒情性』情に対して、俳句の『即物性』――言いかえれば『心を歌う』短歌と『ものをとらえる』俳句ということ。短歌の『連続』に対して俳句の『非連続』――あるいは、短歌の『流動』に対して、俳句の『断絶』ということ。」を述べていられる。右の俳句の方は「春なれや」の初句が三句の「薄がすみ」にヒビキあい、短歌の方は、二句の「夏きたるらし」が五句の「天の香具山」にヒビキあっている。俳句は感動の頂点を一気にとらえ、全体を緊張にみちびく必要があるので、初句で切れることも多い。

生徒Kのノートには、次のように書きとめられている。

――短歌と俳句――

○どちらも第一印象の新鮮さをたいせつにする。
○俳句のほうは部分的に強く言われる→切れ字
○俳句のほうは象徴的になりやすい→余韻

比較による鑑賞学習（B）

島々に灯をともしけり春の海　（子規）

島々に灯はともりけり春の海

春の海島々に灯をともしけり

夕方の春の気分を巧みに写した句である。「灯をともしけり」と他動詞を使ったことによって、いつのまにか時がたって、海が暗くなったという時の動きが感じられる。「ともりけり」となったら人が灯をつけたのではなく、いつのまにか自然にともってしまったことになる。時のくぎりめがなくなるのである。生きた時間は、生きた把握を通して可能になる。芭蕉のことばを伝えた『三冊子』に次のような一節がある。

乾坤の変は風雅の種なりといへり。静かなるものは不変の姿なり。動けるものは変なり。時としてとめざればとどまらず。止むるといふは見とめ、聞きとむるなり。飛花落葉の散り乱るるも、その中にして見とめ、聞きとめざればをさまることなし。その活きたるものだに消えて跡なし。

「よく見とめ」た作者の時間把握をこの句で味わう必要がある。切れ字について加藤楸邨氏は「短い詩型に気息を充足させ、奥行きの

ある重層性を賦与するたいせつな要素になっている。」とのべていられる。この句についてとくと味わってみたい切れ字である。

「春の海」という体言どめによって句全体が落ちつきを持ち、のどかな感じを表わしている。

Ⅱ　俳句の世界を散文に書きかえてみる学習

流れゆく大根の葉の早さかな（虚子）

いつ、どこで、何をみて、どんな印象をもとに、何を伝えようとしたのかを散文形式で書きとめてみる。

この句のあとに虚子は、次のような説明を加えている。

「この句は、晩秋初冬のころ、田園調布に吟行して多摩川辺をへめぐって、やや末枯（うらが）れかかった紅葉をながめ、風に吹き倒されている薄芒（すすき）の道を通り、あるいは柿の残っている農家の間を抜けなどしてそぞろに景趣を味わいながら、ふとある小川に出て、橋上にたたずんでその水を見ると、大根の葉が非常な早さで流れている。これを見た瞬間に今までたまりたまってきた感興が初めて焦点を得て句になったのである。その瞬間の心の状態をいえば、他に何物もなく、ただ、水に流れていく大根の葉の早さということのみがあったのである。流れゆくと一息に叙したところも、一にその早さにのみ興味が集中されたからのことである。今もなおその時早く流れる大根の葉っぱが強い印象をもって目に残っている。」

（句集『虚子』自叙）

「早さかな」のかなに示された感動や詠嘆の重みをしっかり味わわせる。

生徒Fのノートには次のように記録されている。

流れ行く大根の葉の早さかな　　虚子

冬の初めごろの流れであろう。清らかな水、冷たい水がかなり早く流れくだっている。作者は、散歩していたのであろうか。ふとその流れを見ると、川上から濃い緑の葉っぱが流れてくる。よく見ると大根の葉である。よく見てやろうと目をこらしたときには、もう目の前を流れ下ってしまっている。初めに思っていた以上に流れが速い。

友人の発表をきいて

○川の大きさまで想像して書いた人があったのには驚いた。

○Aさんは、大根の収穫後、そのつけものをするために洗っている農家の情景を想像していたらしい。それがほんとうかもしれない。

先生の説明をきいて

○この句を作者は多摩川べりで作ったとのこと。もっと山奥を想像していたのだが……それにしても、するどい作者の目ではある。

Ⅲ　グループでの話しあいによる学習

① グループの人数は六～七名であった。

② グループでの話しあいまでに、次のカードを用意し、全員が、これに記入した。（カードの大きさは、西洋紙四分の一大であった。）

句（　　）作者（　　）	
わかりにくいこと	鑑賞
季語（　　）季（　　）	
作者について	

記録者氏名（　　）組（　　）

③ グループの話しあいのときに用意したプリントは次のものである。

句	季・季語	疑問点	鑑賞	作者について
きつつきや…	秋　きつつき	句の中心は？	静かな牧場ではすでに落ち葉がはじまっている。その落ち葉はきつつきの木をつつく音にせきたてられている。…「落ち葉を急ぐ」は擬人化…略―	水原秋桜子「馬酔木」を主宰…略…

④ 次表はA組のグループごとのものを「疑問点」中心にまとめた一部である。

俳句	話しあいで出た疑問。その他
すずめの子 そこのけそこのけ お馬が通る	○馬について（ふつうの馬、大名行列の馬、木馬、竹馬、ささの葉でつくった馬などの中のどれか） ○すずめの子（小さくて弱いものを感じさせる） ○そこのけそこのけ（くり返しによってやわらかさが出ている。） ○お馬（童謡風な言い方）
赤いつばき 白いつばきと 落ちにけり	○「散る」でなく「落ち」と表現したわけ。 ○「と」のはたらきについて。 ○「に」について。
花散るや 耳振って馬の おとなしき	○「おとなしき」のとめ方についてこのあとに省略があるかどうか。 ○「耳振って」の「つ」が大きな字になっているのはなぜか。（いわゆる促音になっていない？） ○句の中心は何か、馬の様子なのか花なのか。

さるすべり ラジオのほかに 声もなし	○「ラジオのほかに音もなし」としてはどうか。 ○作者はどこにいるのだろうか。
風の木々 プールの子らに さわぎ添ふ	○「子らにさわぎ添ふ」とあるが、騒音の内容は異質でないか。 ○「さわぎ添ふ」は「さわぎを加える」「さわぎを合わせる」どちらに解するのか。 ○この句の主題は何か。
荒海や 佐渡に横たふ 天の川	○「横たふ」は「天の川」と「佐渡」のどちらか。教科書には「黒々と横たわっているのは佐渡の島か…」とあるけれど…。 ○夜であるのに、星明りだけで「荒海」とわかるのか。 ○初句切れになっているがここが句の中心なのか。この荒涼たる景と「天の川」との結びつけ方はどう解したらよいのか。
きつつきや 落ち葉を急ぐ 牧の木々	○季語はどれか。 「きつつき」か「落ち葉」か。 ○句の中心はどこか。
	○「落ち葉を急ぐ」の解釈は？まだ落ち葉になっていないので、早くなることを急ぐのか、つぎつぎに落ち葉が先を争って散っていくのか、どちらに解するべきか。
秋の雲 冷たき昼の ミルク飲む	○「冷たき昼の」を「昼の冷たき」とすると、どうなるか。 ○時刻はいつか。昼を過ぎてから飲んでいるように思えるが…

（神戸市立葺合中学校教諭）